

---

# バクの見る夢 『起』

杉月正一郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バクの見る夢 『起』

### 【Zコード】

Z5277A

### 【作者名】

彬月正一郎

### 【あらすじ】

起きたことは変えられない。なら、これから起ることとは変えられるのだろうか？もし、それが可能なら自分だってえていけるかもしれない。夢と、夢を紡ぐものと、夢を見ない少年の話。

桜が散っていた。入学式の日、足早に散りはじめた桜木の中を歩いていると、一人の少女を見かけた。

彼女は木に手をかけ、目を閉じている。

- - - 桜の木には死体が埋まっている。

ならば、彼女はその死者に対して祈っているのだろうか？

ボクは桜と同じくらいの早さで、彼女を通り過ぎる。

- - - それだけの、出会いだった。

四月 - - -

たいして偏差値の高くない、進学校だかなんなんだかの高校の一年生に進級し一週間が過ぎた。

始めはみな緊張して休み時間も静かにしていたが、これくらいになると、いろいろなグループを形成し、楽しそうに談笑している。

それを……このボク、猿本樹は遠くから見つめている。

人間関係というのがついついじつこつこつに人を遠ざけるようになっていたら、なんとなくクラスからあぶれてしまつたらしく。

別に、そのことは構わない。普通の受け应えはしている。いじめられているわけでもない。クラスメイトからは、少し陰気な、静かなヤツとも思われているほうが樂でいい。

――人とはなるべく関わらない。それが、猿本樹が自らにかした戒めなのだ。

「またまた眠そうだな、バツくん

机にだらりと体を預けていると、上方から声がかかつってきた。

神経質そうな眼鏡をかけた、男子生徒がオレを見下ろしていた。

「ああ、委員長。おはよう」

「つむ、朝は一日の計だ。眠そつこじてないでシャツキリしたらどうだ。おはよう」

「説教か挨拶かどっちかにしようよ……」

「時間がないので短縮した。許せ」

…」こつは紫藤拓哉。「うちのクラス委員を務めている、真面目でいいヤツで変なヤツだ。

クラス委員決めのとき、わざわざ自分から立候補して委員長になる程の委員長属性。

おしい、これで彼が女だったら……なんだといつのだ。

「…まだ寝ぼけているみたいだ」

「ふむ、バツくん。お前はいつも眠そうにしているな。夜寝ているのか?俺も就寝は遅い方だが、そんなに眠いわけではないぞ」

「オレのことは放つておいてくれよ委員長。それと、バツくんとか言つな

「む、何故だ?俺が三田三晩考えた愛称がきにくわんか

委員長はひじく心外だと訴える。

「そもそも、なんであだ名なんてつけるんだよ

「クラス委員たるもの、クラスメイトには愛を持つてあたらねばならん。そのための愛称だ」

…「イツはこつはうやつなのだ。真面目で真面目過ぎて、なんだか変な方向に行ってしまう。

「やうが、よくわかった。よくわかったから、どこかへ行ってくれ。

オレは夜型だから、昼眠いだけなんだ

「ど」かもなにも、俺の席はお前の前だ

そういうて、ボクの前の席に腰をおろす。

「夜型だらうが朝型だらうが、学生の本分は勉強だ。授業中寝てばかりでは、ついていけなくなるぞ？」

「…ある程度の点数は取れるから、心配はないよ」

「うむ、確かに学力診断のテストは見事だつたな。だがしかし、それはそれ、これはこれというものだ」

「口うるさくな、委員長。そんななんじや - - -」

何かしらの反論をしなうとしたとき、教室の空気が固まった。

一人の女生徒が - - - 教室に入ってきた為だ。

学校指定の制服を、なんの違反もなく着こなし、真っ黒い腰まであるストレートの黒髪。細面で、顔色が悪いとしか思えない白い肌の色。

彼女をみるのは、おおよそ一週間ぶりだった。

クラスメイトはそんな彼女を遠巻きに見つめる。

-----  
創崎誓衣この出席不良児は、入学前からかなりの有名人だつたらしい。

彼女は確かに足取りで、自分の席に座る。

みな久しぶりに来た彼女に興味津々だが、誰も声をかけられない。

「ふむ・・・」

いや、ここに一人いたか。MAXレベルの委員長属性をもつたこの男が。

「おい、紫藤」

「なんだ?」

「なにする気だ?」

「知れることを。委員長としての務めを、果たしていくの」

委員長はそつそつと立ち上がり、真っ直ぐ、創崎のところへ歩いていく。

「おはよつ創崎」

「……」

息を飲むクラスメイト達。（ボクも含めてだ）

「一週間ぶりだな。いろいろと配布物がある、一限が始まる前に担任のところへいくがいい」

「…………」

「ああ、ちなみに恋れているかもしかんから言つが、俺はクラス委員の紫藤だ。よろしく」

「…………」

「学校についてわからなこと」があつたらなんでも聞いてほしい」

「…………」

「……ちなみに、今日の学食の田舎わりは豚の生姜焼きだ」

「…………」

「ああそれと、君の愛称を考えて来た。『チカツチ』といつのほどうだらづ~」

「…………」

「つむ、氣に入ってくれたか。それでは、今日も健やかに授業を受けてくれ」

そうこいつて委員長はおびすを返し、こひりて笑つてへる。そのとまは、ながら敗残兵のよひだつた。

「……ねかえり」

「笑つてくれバツくん。この俺を」

「お前はよくやったわ。ただ、相手が悪かったのさ」

「そんなのは言い訳にしかならん。俺は、俺という限界に阻まれたのだ」

本気で落ち込んでいるようだった。

…この男には、レアな状態かも知れない。

まあ、全くの無視じゃなあ…。

「そんな落ち込むなよ」

「うむ、チカツチという愛称は気に入ってくれたようだからな」

「お前はあの三點リードにどんな幻想を抱いたんだ…？」

そんなこんなで担任が来て、ホームルームが始まった。

担任も創崎がいるのには驚いたみたいだが、そこは大人、そんなことは噫にも出さず。ホームルームを進める。

ボクは窓の外を眺める。春の暖かな陽気のいい天気だった。

……あとになつて思つ。もし今日、雨さえ降つていなければ。いやせめて、曇りだったのなら。

ボク等の運命は、変わっていたのだろうか？

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

創崎は特に問題を起さずともなべ。（とこつか、なこもしない）  
おかげで授業は滞りなく進行し、ボクは委員長と田替わり定食を食べ、午後の授業となつた。

……眠い。

ボクは体质的に、夜眠ることが、できない。正確には、眠るわけにはいかない。故に、日中眠るしかないのだが、悲しいかな、今は学生の身。おねつぴらに眠ると怒られる。

……しかし。

午後の授業は、ショッパンから数学。飯を食つたあとに、数学。これは、耐えきれるものでわないのである。

- - - 少しくらいなら、いいか？

「これは学校だし。夢を見る心配はそれほどないだろ？」

- - - 例え夢を見ても、今日くらくなら我慢できる。

それに、いつも授業中寝ていても問題はなかつた。

- - - 少し、おねつぴらせてもらおう。

窓から差し込む春の陽気が、いつもたやすくボクを眠りの世界に引き込んだ。

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

夢を見る夢を見る。自分の夢を見ないボクは誰かの夢を見る。

そこは、見覚えのある教室だった。

とこより自分の通っている学校のだった。

「…別に夢は見なかつたか」

誰かの夢の中に入つては、自分から目覚めるのは不可能だ。夢が終わるか - - - 終わらせるか、誰かに起こしてもらひしかない。

日常は何も変わったところは見せてない。授業も流暢な英語が教師の口から聞こえてくる。

英語? 今の授業は英語だったか?

… どうやら数学の授業は終わり、今は英語の時間らしい。

我ながら寝すぎだな。

ボクはぼんやりと教室を眺める。

委員長、創崎でさえまじめに授業を受けている。

黒板には、『金曜日』とかかれ、日付は明後日でのものとなっていました。

あれ。今日は水曜日のはじめやあ。

というより、授業は時間割通りなら、今日は英語はない。時刻は1  
2時ちょっと前。あと30分もすれば、昼休みだ。

昼休みは先ほど終わった。

おかしい。  
なんだか、すべて元気いとおかしい。これではまるで夢

そう思おったとせ。

不意に

地面が

揺れた

「なあつ！？」

地震！？地震だと！！？

「お、大きいぞ！？」

教室内はパニックだ。みんな立ち上がることもできずこ、悲鳴をあげている

ボクは、そんな中ひとり落ち着いて、机の下に避難していた。

ゾワリ、とボクの中から何かが総毛立つ。

なんで - - - ?

体が軽い。

疑問に思つた - - - 瞬間。2階の床が抜けた。

「なつ！？」

みな、その地割れのような落とし穴に落ちていく。下には同じ用にパニックになつていた三年生が - - - 。

落ちる前に崩れる床を蹴り飛び跳ねる。

すでに身体能力はリミッターを越えた動き。

自分が想像できる、限界の動きだ。

「くつ - - - !」

早く、早くしなければ - - - 。

ギリギリ、足場が残つてゐる黒板側に着地する。

やはり、そこも端からどんどん崩れている。

そのときには、避難していたと思われる - - - ここまでできたら避難もないが - - - 女生徒が広がつた落とし穴に落ちそうになる。

ボクは、反射で女生徒の手をとり、引き戻す。

そんなことをしている場合じゃないのに - - - 。

その女生徒と目が合ひ。

その顔は混乱と壮悲に - - - なつていなかつた。

しいて言ひながら、疑問。

そして、それは驚愕となる。

「な、なんで - - - ?」

その女生徒 - - - 創崎は、唇をわななかせて。

「どうして - - - ?」

何を、気付いた?夢の中、その程度の矛盾、気付けるわけないのに。

そして、その後の展開は、ボクを驚かすには十分だった。

「 - - - ! ! !」

切り離される。

彼女は落ちる。

ボクは飛ばされる。

一階へと。

現実へと。

- - - これは、夢の終わりだ。

彼女が死ぬから、この夢はもうこれ以上繋がらない。

だけど、最後に疑問を持つ。

なんで - - - 彼女は気付けたんだ？

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

ボクは夢の終わりとともに元日を覚ます。

教室は静まり返り、みな、一人の女生徒に注目している。

創崎は席から立ち上がり、田を見開き、肩で息をしてくる。

「どうした創崎？」

数学教師はかわいそうなくらい狼狽しながら、創崎に聞いた。

「…………気分が悪いので早退します」

「……が早いか、創崎は自分の鞄を掴み、駆け出すよつて教室から出ていく。

「あ、待ちなさい創崎くん！？」

数学教師は後を追つて出ていく。

途端、ざわめく教室。

「なあ、何があつたんだ委員長？」

「む、お前も寝ていたのバツくん

「ああ。だから状況が掴めない。できれば説明を頼む

「説明、といつほどのものでもないのだがな

委員長はそこで息を一つついて。

「創崎がまたやらかした

「なにを？」

「寝ぼけていたのかどうだか知らんが、授業中に大声出した

「どんな?」

「『私の中に入ってくるな』とな

「…………」

「まあ、創崎らしき奇行と言えば奇行だ。今更気にするべきことじ  
もない」

「…………」

見ていた夢は彼女のだ。それは間違いない。だけどボクはまだ混乱  
していた。

今まで、一度もなかつた。

夢見てるものから、自分が侵入者だと認識されるのは。

数学教師が教室に戻つてくる。

「あ～創崎は早退だそうだ。静かに！授業を進める

今だにざわめく教室を数学教師が静めよひとする。

その最中、ボクはずつと彼女がいた机を見つめていた。

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

放課後。ボクは足早に帰宅の準備を始める。

家に帰つて早く寝るためだ。ボクがわりと安全に眠れるのはせいぜい10時まで、あとは誰かの夢に迷い込まないよう、起きてなくてはいけない。

「ふむ、帰るのかバツくん。忘れ物なき用にな

委員長が帰りがけに声をかけてくる。

「ああ。委員長は?」

「生徒会だ今年は生徒会長に立候補しようと思つてな

「へえ。なんかもう生徒会長みたいなイメージあつたけどな

「うむ。生徒会長になつた暁には、俺の野望の為にお前にも働いてほしー」

「野望つて?」

「ひむ、学食のメニューからインジンを廃絶する!」

「……」

壮大な野望だった。

壮大過ぎてついて行けなかつた。

委員長とは挨拶もそこそこにボクは帰宅する。

帰り道、考へる」とはやはり彼のことだ。

果たして、彼女はいつたい何処まで覚えているのか？

恐ろしいほどのリアルな夢だったが、これが現実である以上、あちらが夢だ。

彼女の夢に入り込んでしまつた。それは間違いない。

だけど、彼女は、創崎はそれをどれくらい覚えているのだろうか？

夢は、一瞬の脳の情報処理機能の合間に見せる記憶の断片の寄せ集めがほとんどだ。そしてそれは日常的過ぎて、目覚めれば記憶にも残らず消え去ってしまう。

できれば、忘れているか、錯覚であつたと思つていてほしい。

もし、ボクの正体に気付いてしまつようなら……。

「いや、それは杞憂だよな」

どこの世界に、知人がちょっと夢に出てきたくらいで、それが侵入者だと思つヤツがいる？

例え、思い込みが激しく、そう糾弾されたとしても、それをせし

める証拠はないのだ - - - 証拠がなければ許されることではない、  
が。

いや、もう考えるのはよそう。家に帰つて、ぐつすり眠る。また夜  
は眠らないのだ。人間である以上、睡眠はどうなればいけない。

そうぞ、たいして変わったことがあつたわけじゃない。ボクの運命  
は、そんなことじやびくともしない。

少し - - - 夢見が悪かつただけ、それだけの話し - - - 。

五月 - - - 。もつ日は長くなつていて、この時間だつて、まだまだ  
明るい時間帯。

- - - それが、一瞬の影がさした。

太陽に雲でもさしたかと顔を上げる。

- - - 長い、坂道。

- - - 人通りは皆無。

- - - 音も、聞こえない。

その長い坂道の上。

長い黒髪。

学校の制服をきつたり着こなし。

その顔色は、白ことひより、悪い。

まるで、旧来の怨敵でも見るよつた日付まで。

まるで、未来の宿敵でも見るよつた日付まで。

- - - 創崎誓衣が、立つていた。

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

ボクは、動けない。

蛇に睨まれた蛙も同じ。

創崎誓衣の瞳に捕われ、見つめ合つこと、時間にして数秒のことだつたろうけど、ボクの中では一時間はたつたのではないだろうかといつ錯覚さえ覚えた。

「…貴方が - - -

喋つた。創崎誓衣が喋つた。

何故か、目の前の存在が人間の言葉を喋つたことにたいして、ボクは驚いていた。

「 - - - 私の夢に入ってきた - - - ?」

世界が巡る。世界が廻る。

足下が、覚束ない。

音がよく、聞こえない。

目がよく、見えない。

頭がうまく、働かない。

だけど、創崎誓衣の存在だけは - - - わかる。

聞こえる見える感じれる。

ボクの中のそれが訴える。

アレは、別格だ。

ボクが、常識はずれの異端だったとしても。

アレは、別格なのだ。

「 - - - どうなの？」

それが聞いてくる。

喉がカラカラだ。

ボクは全身の力を動員して、首を縦に動かす。

アレから、言い逃れるなんてとんでもない。

何故気付かなかつた？

ボクは、あんな巨大なものとずつと同じ教室にいたなんて - - - !

震えが停まらない。

考えが纏まらない。

何故 - - - 答えた？

今まで、少なくとも八年以上、一族の者以外には明かさなかつた秘密を - - - 絶対の暗黙を - - - 何故破つた？

「 そう - - - 」

彼女が頷く。

落ち着け。落ち着くんだ。

何を - - - 恐れる」ことがある。

何を - - - 怖がる必要がある。

目の前にいるのは、普通の女の「じじゃないか。

鶴原や鬼ヶ島などではないのだ。

人間 - - - なのだ。

「創崎さん - - - 」

ボクはよつやく声を搾り出す。

その声は、自分でもわかるくらい震えている。

「何をいいているのか - - - オレにはわからないよ」

ボクは、何とかそう言った。

なんとしても、ここは「まかさなくては - - - 。

彼女はその整った眉をピクリと動かした。

「創崎さん。いきなり現れておかしなこと言われたから思わず頷いたやつたけど、一体何の話しなんだ? オレが一体何をしたって言つんだよ?」

少し落ち着いたせいか、饒舌になる。

「オレ急いでるから、ほかに用がないならもう行くよ。ボクは夜眠れない体質だから、今のうちに眠つとかなきゃいけないんだ」

それじゃあ、といつてボクは坂を上がり、彼女の横を抜けようとする。

その瞬間。

「しちばっくれるっていうの？別に構わないけど……それだと貴方死ぬわよ」

「え？」

立ち止まる。

「貴方の運命は、決定してしまつていると言つたのよ」

「……どうこりつ意味だよ？」

「知りたい？」

そこで彼女は、よつやく人間らしい仕草を見せた。

少し、唇を歪めたのだ。

「それなら、ついてきなさい」

彼女はそういうと坂をぐだつていぐ。

ボクはそれをぽけっと見つめていた。

「何をしてるの？早くしなやー」

創崎は、先程とは逆に、ボクを見上げて、言った。

「創崎さんが何を考えているのがボクにはさっぱりわからないんだけど……」

もう、先程のような戦慄はない。

だけど、ボクの中には混乱だけは残り続けた。

「早くしなやい。日が暮れるわよ」

……………いつなつたら毒皿だね!?

彼女についても幾つか聞きたいこともある。

「わかったよ。だけど、どこに行くのさ?」

ボクの当然の問いに、創崎は当然の様に答える。

「もちろん、私の家よ」

+-+-+ - + - + - + - + - + - + - + - +

創崎誓衣について知っているアレコレ。

身長は160センチ前半。腰まで届く長い髪。整った顔立ちと白い  
というには憚られるような悪い顔色。実際病弱であるらしい。全体  
的に細身で、どこか柳の木のようなイメージがある。

以上が身体的特徴。

次が、クラスメイトから聞いた彼女の特徴。

ほとんどの意見がこれに集中する。

いわく - - - 毒電波。

彼女の噂話には暇がない。  
いとま

火事が起ると言つては火のない所に消防車を呼んだり。

教師を殴りつけて、

「コイツは人を殺そうとしている！」  
と訴えたり。

「溺れる人が出るから」

と夏にプールの水を全部抜いてしまったりとか。

とにかく、いろいろな事件を自分の思い込みで起こしたらしい。

実際、火事は起きてないし、教師は殺人犯じゃなかつたし、プールで溺れたヤツもない。

全て、彼女の思い込みなのだ。

とにかく、日頃対人関係を気薄にしているボクでさえ、彼女の常軌を逸した言動を知っているのだ。

ボクは彼女とは中学も別だつたので、この学校に入るまで知らなかつたし、クラスメイトといつても話したことなんて皆無だ。

彼女は、たまに学校に来ては、誰も近付かせないオーラを発し、必要ないことは何一つ喋らない。そして、帰っていく。

仲のいい友人もいない。とにかく、変わっていた。

ボクはそんな彼女とは永遠に縁がないだろうと思つていた。

少なくとも、今まで。

以上が、ボクが彼女について知つている予備知識だ。

そして今、そこに新たなるページが書き込まれようとしている。

「どうしたの？早くあがりなさいよ」

「……」

ボクは何故、こんなところにいるのだろうか？

ここは創崎の家の前。なかなかよさそうだが、あえて特筆するようなところのない、極めて普通のマンション。その六階にある創崎と書かれた玄関の前で、ボクは固まってしまった。

「いつまでそこに立っているのかしら？·そこから見られると通行人の邪魔だと思つるのだけど」

「ああ、おじやまします」

そういうてボクは家に入る。

……つまりボクは、女の口の家に入るのことでいつもなく緊張してたんですね。

……情けない。

家中にはマンションの外見と同じで、一丁も普通の家だった。

よく立っている。

「……」

なんとなく、呪いの紋様が画かれていたり、部屋が黒一色で統一されてたりとか、いろいろ想像していた分、なんだかひょうし抜けした。

「使って」

創崎がスリッパを下におく。

…常識的な配慮だ。

…まあ、普通が一番なんだけどね。

「家の人は？」

「いないわ」

そつけない返事。

と、いづれとは一人きりといづれですか。

…緊張する。

「」まで一般的家庭を見せられると、相手があの創崎誓衣だとしても緊張する。

「ついてきて」

「どう行くんだよ？」

「私の部屋よ」

…女の口の家に行くのも初めてだけど、女の口の部屋に入るのも初めてだ。

そしてその相手は創崎誓衣。

「LJの部屋よ

たいして広くないので創崎の部屋には早くたどり着いた。

…ドアはいたつて普通のウッドベースのドア。

…いつたい中はどうなつてこるのでだろう?

LJまでは普通の、じへー一般的な家庭だった。

「入つて」

創崎がドアを開け、ボクを招き入れる。

部屋の中は、簡素ではあるが、女の口うしいものだった。

木目調の本棚にタンスとクローケ。机の上にはかわいらしげな小物が並んでいる。

フローリングの床には暖色系のカーペット。ベッドにはピンク色の布団がかけてある。部屋の隅にはサンドバックと全身鏡が置かれていた。

…サンドバック?

サンドバックだ。バックではない。砂袋と書いてサンドバックだ。

……。

そのサンドバックは全身鏡の隣りに吊されていた。

ボクサーが使う。本格的なヤツだ。

かなり使い込んだ後が見られる。

…一体どうやって手に入れたんだ？

「通販で買ったのよ」

創崎がボクの心を読んだように答える。

…そうか、彼女はボクサーだったのか…。

「そんなことより」

創崎はどこからかクッションを取つ出してボクに渡す。

「座りなさいよ。長い話しなりそういうから」

ボクはクッションを受け取り、しづしづと座る。

「待つてなさい。今飲物を持ってくるから」

そういうと創崎は部屋から出ていってしまった。

：一人残されてしまった。

仕方なしに、視線をさ迷わせ、現状を把握する。

まず第一に、ボクは故意ではないが、創崎の夢の中に入ってしまった。

そして、それが何故か創崎にバレてしまい、聞い質され、しらばつ  
くれようとしたら

「あんた死ぬわよ」

発言。

そしてそれが気になり、「いつのこいつで來てしまったわけ  
だが - - - 。

やはり、アレは創崎の錯覚だと説得するしかないだろう。

コレは、ボクだけに関わる問題じゃない。

- - - 一族に関わる問題でもあるからだ。

そのとき、田に留まるものがあった。

本棚の上段部分。そこにある本は全て、年号や日付がふられていて、  
それが綺麗に数十冊と並んでいた。

…田記をつけているのか？

それを眺めていると。

「それは今から説明するわ

と、突然後ろから声をかけられた。

飛び上がるくらい、驚いた。

「そ、創崎さん…」

創崎は小さい持ち運び用のテーブルの上に、紅茶の入ったカップを乗せ。後ろに立っていた。

「通るわよ」

そうじつてボクの前にテーブルを置き、腰をおろす。

姿はまだ、制服のままだ。

「紅茶でよかつたかしら？　あいにく、今は家にこれしかなくて」

「あ、ああ、構わないよ。… いただきます」

紅茶を口に含む。うん。普通の紅茶だ。

「さて、それそろ本題に入るつかしら」

創崎がボクを覗き込むよつて言ひ。

ボクはその仕草にドキリとする。

「… 創崎さん。何度も言つけど。オレは創崎さんが思つてこないよつて

なことは何もしてないんだ。もし、オレが創崎さんの夢の中に出てきたとしても、それは創崎さんの錯覚で - - -

「 もう、よくわかったわ」

ボクが言つて終わる前に、創崎が遮つた。

「 わかつてくれたの?」

「ええ、確かにフェアじゃないわ」

「フェア?」

「私は - - - 貴方が認めなくとも、理解してゐる。貴方が一般とか常識から逸脱していることを」

「 .....」

普通ではなく異端である。

それは、ボクがずっと抱え続ける問題。

- - - それでも、ボクは、ずっと普通であるように生きてきたのに。

生きて行きたいのに。

「 ... 何を、言つてるんだ創崎さん」

「でも、貴方はまだ私のことを理解していないものね。私が - - - だけ異端で間違った存在か」

理解？知つてはいる。創崎誓衣がどれだけオリジナルな存在か。

それでも - - - ボクにとつては、普通を逸脱していない。

常識を - - - 越えてはいけない。

人間を - - - 踏み違えてはいけない。

「創崎さん。オレは、創崎さんに言えるような - - - 「

「私は - - - 」

また、遮られた。

ここで、創崎誓衣は、言葉を溜める。

その眼は、何処までも深く。

その眼は、ボクだけを見て。

その眼は、何かを願うように。

何かに誓いたてるように。

何かに宣誓するかのようだ。

彼女は言った。

「私は、ラプラスなのよ」

日は、傾き始めていた。

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

『ラプラス』

名前としては、わりと有名な部類に入るのではないだろうか？

誰しも、一度は聞いたことのある神話。

パンドラの箱。

その話しが出でるのが、『ラプラス』だ。

お話しはこうだ。パンドラといつ少女は神様から『絶対に開けてはいけない』と言われた箱を受け取った。

パンドラも最初の内は言い付けを守るが、最終的には好奇心に負け、箱を開けてしまう。

すると、箱の中からは欲望やら病氣やら不幸だとか、『災厄』と呼ばれるものが飛び出してきた。

パンドラは慌てて蓋を閉めるが、後の祭。災厄はほとんど出ていつてしまい。あとに残つたのは『希望』だけだった。という話しだけど、これは解りやすい解釈の話で、実際残つていたのが - - -『ラプラス』である。

### 『ラプラス』

パンドラが最後の最後で閉じ込めた『災厄』。

それが、『ラプラス』だ。

その災厄は - - - 予知。

それも完璧な未来を予知する。

予知と言つ名の災厄。

災厄と言つ名の予知。

その災厄が箱に残つていたからこそ、人は未だ未来を知らず。

災厄にまみれた世界でも『明日はきっとここにある』と、希望をもつて生きていける。

だから、最後に残っていたのが、希望。

人が、生きていくための、知らないことによる、希望。

つまり、希望を根こそぎ奪う災厄が、『ラプラス』なのだ。

つまり、絶望を人にもたらす災厄が、『ラプラス』なのだ。

ボクの知識ではこんなものだが、実感として - - それがどんなに恐ろしいものか、解る。

件崎の - - まるで件崎の悪魔だ。

そして、田の前の少女は、その名を名乗った。

自身を災厄だと名乗った。

自身を絶望だと名乗った。

自身を - - - 人外の化け物だと。認めたのだ。

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

「私は - - - ラプラスなのよ」

- - - それが、彼女の告戒だった。

「どういう - - - 意味だ？」

件崎、創崎。名前は - - - 似通つてないわけじゃない。

「そうね、それだけじゃわからないわよね。ラプラスっていうのは  
- - - 「

「それは知つている。神話に出てくる予知をする災厄の名前だらう  
?」

今度は、ボクが彼女の言葉を遮る。

「あら、博識で助かるわ」

「別に、それほどでもないわ」

声は、自然と険のあるものになる。

件崎の縁者なら……ボクのことを知つていて当然だ。

そんなボクの態度をいぶかしく感じたのか、彼女は少し眉根を寄せたが、話しを続けた。

「まずは、これを見てもらつたほうが早いわね」

そういうて彼女は本棚から、一冊の本を取り出してボクに渡す。

それは、先ほどの日記張だつた。

「読んでもいいの？」

「ええ、そのために呼んだんですもの」

パラパラと日記をめくる。

書いてある文章は断片的で、とても日記として用をなしているとは思えない。

例えば、

『四月一十日。イメージは高くて遠い。場所は学校。誰かが迷子になり。田付は不明』

『四月一十六日。イメージはもやもやした感じ。場所は家。サッカーで負ける。田付は不明』

『五月一日。イメージは疲れてる。場所は教室。担任が遅刻してきた。田付は黒板通りなら五月四日』

「なんだコレ……？」

思わず、口をついて出してきた。

書いてある」じが、田畠の口付より、少し先の「とになつてこる。  
そして、最後にそれが起きた田付が書いてある。

これでは、まるで - - - 。

「予言書、みたい？」

田記から田を離す。

そこには、創崎誓衣の顔が - - - 。

「そ、創崎」

「それは、私が見た夢を書き綴つたもの。よく読みなさい。…少し  
くらいい記憶力があれば、それがどれくらいの正当制があるかわかる  
でしょう?」

ボクだって、一コースくらいは、見る。この田記に書かれているの  
が日常的なものから、一コースとして流れるものまで、かなりの正  
確さで予言されているのが、わかる。

「こつから - - - 」

創崎はボクから田を逸らし、独白のよひに、言つ。

「いつから、そんな夢を見始めたのかは覚えていないわ」

「予知夢。それは予知夢と呼ばれるものだ。

「私は……子どものころから、既視感が多くつた。知らないはずのことを知つていて。先に起つることを予見したり」

「正夢とも言われる、見た夢が現実になる」と。

「それが、いつ夢見た内容が未来の現実だと気付いたかは覚えていないけど五年前から、じつして……」

「件崎の家系が求める、未来を支配する」と。

「夢日記をつけているの。できるだけ詳細に。でも、夢は断片的過ぎて……イメージによる予知が多くて、いつ起つるか、なんてことはわからないことが多いけど」

「それを体現していると言つのか、彼女は。

「それでも、日記をあとから読み返せば、それが前から知つていたと……知ることができる」

「それが、どれだけ巨大なことなのか。

「もつとも、それは記録であって、記憶ではないから、たいした意味はないわ……夢に見たことは既視感として、私の中に残り続け

るから

しかし - - - 。

「これが、私が話しておかないといけない。現時点であなたに教えておけるすべてよ」

創崎はそうこいつて言葉を締め括る。

ボクは - - - 。

「それじゃあ、足りないよ、創崎」

ボクは言つ。

「それじゃあ、全然足りないんだ、創崎」

彼女を見つめ。

「確かに、この日記にはキミが予言したと思われるものが、書かれている。だけだ - - - 」

言葉を紡ぎ出す。

「それが、コトが起る前に書かれた。といつ前提が、まるでない」

彼女は田を逸らさないで、ボクを見る。

「それに、よくよく読めば、この日記に書かれたことは、あやふやな部分も多いくらい。起きる日の日付が入っていないなら - - - こつか起こ

つをつなごとを書いておけば、ここにだ

ボクは、なぜか彼女から目を逸らす。

「残念だけどね。この程度なら、フニアとは言えない。フニイクだとしたら、といひ疑念をボクはいだがざるえなし」

紅茶を飲む。いつのまにか、すっかり冷めてしまっていた。

「ナウ、うたぐり深い、のね」

「慎重なのが。じつみえて、苦労してゐんだよ」

少し余裕を見せようと、一ヤコと笑ってみせる。

「貴方に笑顔なんて似合わないわよ」

酷いことを言われた。

「ナウね……始めから全てを信じてもうおうなんて、虫のここと話しきね」

そういって彼女は紅茶を少し飲む。…思えば、彼女はずっと紅茶に口をつけていなかつた。

「ナウにう」とだか、うた

ボクは、紅茶を飲み干し。

「もつ帰るよ。」馳走様でした

「待ちなさいよ」

「なに?」

そういつて彼女は、机から一枚の手紙をボクに差し出す。

「これは?」

「この間見た、明日の夢を書いたものよ」

+ - - + - + - - + - - + - - + - - +

『未来』というものに固執する一族がいる。

件崎。

未来といつ、予測不可能な、どんな数式も算式も導き出せないものを、知ろうとする。もしくは、その断片。いや、流れる方向だけでもいいから、その一端を掴むことに固執する一族。

件崎。

その一族は摸本や縫原などとは違い、呪いを受け入れた家系。

ボクに言わせれば、縫原なんかよりよっぽど最悪な一族だ。

未来 - - -。

ボクは、そんなもの知りたくない。

田はすつかり落ちてしまい。辺りは暗闇に包まれている。

ボクは創崎の家をあとにし、家に帰る途中だ。

- - - 明日、起じること?

- - - そりよ。それなら、証明になるでしそう?

- - - コレがもしハズレていたら?

- - - その時は、これは私のただの思い込みだったところだね。  
貴方のことも、錯覚だつたと認めるわ。

先ほどの会話が甦る。

もしも、もしも、彼女が予知を - - - 完全でなくとも、高い確率で  
当たるのなら - - -。

あの時、教室でみた夢は - - - ?

「バカバカしい…」

そんなわけ、ないじゃ ないか。

件崎でさえ、未だまともな予知を体現していないので。

それを縁もゆかりもない一般人である彼女が、出来るわけがない。彼女は、思い込みが激しいのだ。電波系、と回りから囁かれるのも頷ける。きっとボクのことも、思い込みの当て推量で指摘したに過ぎない。

だとしたら、ボクはバカをみたという話しだ。

電波の話しを真面目に聞き、貴重な睡眠時間を浪費してしまった。

「早く帰つて寝よう」

今なら、あと二時間は眠れる。

坂道を、今度こそ上る。

「…そういうえば創崎は、どうしてボクの帰り道を知っていたのだ  
ら?」

ふと、そんなことを気になり出したが、すぐにそれを思考から切り離す。

もう創崎のことを考えるのは沢山だった。

家に帰り着く。

築三十年は越えてそつな一階建てのぼろアパート。

その一階の角部屋が、ボクが高校を入学してから一人で暮らしている。

鍵を取り出しながら階段を上つたところで、気がついた。

ボクの部屋の前に、誰かいる。

創崎より一回り小柄な、女の口。長い髪を後ろで縛り。前髪を一つに分けておでこを出し、前に垂らしている。服装は、ある学校の学生服だった。

旧知の間柄の人物だったが、ボクは少しばかり警戒しながら近づいていく。

決して、友好的な関係ではないからだ。

向こうも、ボクのことに気付いたようで、ドアから、ボクの方に向かなる。

「やあ……」

おぞなっこ、挨拶をする

「お帰りなさい。樹お兄様。今日は随分と遅いお帰りですね」

そ、う、ニッコリと邪悪な笑みで、<sup>猿本夢理</sup>猿本夢理はボクに挨拶をした。

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

猿本夢理。たしか今年で十五歳。私立のお嬢様系学校に通う、中学三年生。

ボクとの続柄は、よくわからないが、おそらく叔父と姪だろう。だが、年は近いし、なにより叔父さんと呼ばれるのも抵抗がある。

故に、兄。ということなのだ。

「…相変わらず、赴きのある家ですね、お兄様?」

からかいつひづりの笑顔でボクに問いつ。

…………そりゃあ、キミんといひの千坪の豪邸には敵いませんよ。

とりあえず彼女にな部屋に入つてもらつた。決して友好的とは言い難いが、それでも礼節は忘れてはいけない。

「お兄様、普段は学校が終われば真っ直ぐ帰つてらつしゃるのに、

今日に限って遅かったですかね？何か用事でも？」

座布団を敷きながら応える。

「いや、別に。道草食つていただけさ」

創崎のことは、本家の間には言わない方がいいだろう。

「そうですか。お兄様は赤貧を美德なされるお方ですからね。それは十分考えられることでした。それで、どのような雑草を - - - 「

「道草食つてたわけじゃない！- - -」

思わず、突っ込み。

「冗談ですわお兄様。かわいい妹からフレキシブルなジョークです」

かわいらしく「口口口」と笑う。

「それで、一体どんな用なんだよ」

ボクは座布団に腰をおろし、夢理に聞いた。

「あら、早速本題ですの？少しばかり私とトークを楽しみませんか？」

「楽しいのはきっとお前だけだ」

「つれないですね。 - - - 今日は本家の使いで参りました」

やつぱつ、やうか。

「明日の晩間、お爺様がお呼びです。摸本宗家までお戻りくださいませ」

摸本宗家。ボクの実家。

「なんの、用なんだらうな」

ボクは、わかりきったことを聞く。

「おやじく、跡田につこてのお話しじょ」

夢理は律義に、わかりきったことを返す。

「ボクにはあまり、関係ある話しじゃなこと思つんだけどな」

「それを決めるのはお爺様やお父様ですわ。とにかく、有資格者は、私も含め全員出席。」これは決定事項です」

「明日は普通に学校なんだけどな…」

「風邪をひいて下さい。それか、夢久叔父様くらいなら、殺しても構いません」

それは、忌引を使えとこいつだとだよね？

「まあ、爺さんには聞きたこ」ともあるし、明日は宗家で出向くわ」

氣は重いけど。

嫌いなわけじゃ、ないんだから。

家族、なんだから。

少なくとも、あの爺さんだけは。

「さて、宗家からのお使いも終わりましたし…食事にしませんか？」  
お兄様

「食事か…」

今、うちにある食材。冷凍食品。カップラーメン。乾燥パスタ。  
つまり、ろくなものが、ない。

この生つ糀のお嬢様である夢理に食べさせられるものは - - - ?

「お前、道草好きか?」

「お弁当を持つて参りました。一緒に食べましょう」

流された。

「ふーん。準備がいいな。立川さんに作つてもらつたのか?」

「いえ、これは私が作りました」

そういうつて夢理は鞆から風呂敷に包まれた二段の重箱を取り出す。

手作りだと…貴様、何を企んでいる…?

「早起きして仕込みました。なかなかの出来だと思ひますので、きっと満足いただけるはず」

風呂敷から黒光りする高そうな重箱を取り出す。

「開けてみて下さい」

「口一合じ、機嫌よさ気にボクに促す。

…爆発とかしないんだろーなあ?

恐る恐る。ボクは重箱を開ける。

…爆発はしなかつた。

一段目の中には、肉じゃがが入っていた。

肉じゃがが入っている。

あと肉じゃがと肉じゃがある。

その一段目をそつとはずし、一段目を見る。

中には、取り皿と箸。湯飲み茶碗が入っていた。

「肉じゃがしかないじゃないかっ！？」

「ええ。殿方がもつとも喜ばれる料理と立川におそわりましたので

確かに、ド直球の料理だ。大抵の男は肉じゃがで落ちるところでも過言ではない。

だがしかし、ものには限度といつものがあるだらう……？

「そうか。うんまあ、できれば、いくら喜ばれると喜つても、一品料理はよくないな」

優しく、諭してみる。

「やうですね。私としては一品でも通用するカレーにしたかったのですけど、結局はスタンダードに肉じゃがにしてしまいました。やはり、マニアアル通りはいけませんね」

「弁当にカレーはかなりマニアアルから逸脱しているけどな……」

とりあえず、一口食べてみる。

.....。

「如何ですか、お兄様？」

オブラーートに包んだことを言えば、マズイ。

ストレーントに包んだことを言えば、殺す気きか?

何だコレは?甘ことこうひつけ - - - 苦い。

と匂ひが、なんか舌がビリビリこうやーー?

体から、何かイヤな汗が吹き出してくる。

毒だーーー口は、毒物、もしくは劇物だ!

ま、まさか、夢理のヤツ、跡目争いに常時で、ボクを「きもの」にする作戦ではーーー?

夢理を見る。

その顔は『満悦』で、『どう?美味しいでしょ?』といいたげな表情だった。

「夢理……」

「あらあらお兄様。あまりの美味しさに言葉も出ませんか」

殺人犯は笑う。

「それでは私も失礼していただきますね」

ボクがどうやってダイニングメッセージを残そうかと思案していると、彼女はおもむろに毒物を箸に取り、口に運んだ。

「……」

「うん。美味しい。立川は何故この味がわからないのでしょうか?」

心底、不思議そうな顔をする。

ボクは、立川さんに心底同情した。

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

夜もふけてきた。

結局、肉じゃがは半分くらい残つてしまい。明日食べるから、といふことで皿に移しといた。

明日なんて、永遠に来なればいいのに。

「それでは、失礼いたしますね、お兄様」

「ああ、気をつけてな」

彼女はすでに車を呼んでいたらしい。

と、いつより此処には車で来ていた。

なぜ、車の中でなく、ドアの前で待っていたのだろう……？

「お兄様？」

「ん、なに?」

「私は本音を言つますと、貴方には摸本家の敷居を跨いでほしいとは思いません」

「……」

「お爺様がどうしても、とのことだつたので、今度の使いを承りましたが - - 貴方が摸本家に相応しくないと言つのは、お爺様以外の一族の総意です」

少しは - - 友好的な雰囲気が今日はあつたのにな。

「摸本家は貴方にとつて敵だらけです。それはコメコメ忘れないよ  
うに」

夢理は - - 摸本家の長女は、感情の籠らない目を向ける。

「ああ、それは重々承知してゐるよ」

ボクも、自然と冷たい声になる。

「それでしたら、結構です。それでは、失礼致します」

「ああ、じゃあな」

パタンと、静かにドアが閉まる。ボクはそれから十分な時間がたつてから、ドアの鍵を締める。

「やつぱり、そうだよなあ……」

一族、家族。

ボクには有り得ないものなのだ。

異端は、孤独であるからこそ異端。

創崎誓衣。

彼女もまた、孤独なのであるつか？

ひとりぼっちで迷っている。あの時のボクのよう。

「…べだらない」

ボクは皿に移った肉じゃがを全て生ゴリに捨てた。ついでに、あの手紙もだ。

知つたことか。未来とか一族とか異端とか跡目とか。みんな、ボクには関係ない。

爺さんに何を言われたって断るわ。

未来のことなんて知つたことか。

ひどく眠い。

もつ悪夢を見ようが構うものか。

そんなもの、餘りごく済んでしませる。

ボクはボクの意志で、ボクの世界を閉じる。

最後に考えるのは、創崎誓衣のこと。

異端は、孤独であるから異端。

彼女もボクと同じ異端であつたとしども。

おそらく、友達なんかにはなれっこないんだよ…。

世界を閉じる。その中、ボクはまだ有り得ない現実を見る。

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

雨が、降っていた。

『雨が、降っていた』

場所は駅前、突然の雨にみなが急いで屋根のあるところにかけていく。

『場所は駅前、大勢の人が、雨の中にいる』

空にまた「ロロロ」と雷雲が

『空には厚い雲があつて』

稻光が轟き、ビルの看板に雷が落ちる。

『雷が、看板に落ちる』

雨は勢いを強める。前身はびしょ濡れだ。

不意に、そこでボクの上に傘が。

ボクは振り向いたところで - - - 。

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

摸本家。

それは古くからある名家で、今でも財界、政界に問わず、力を持つ家系。

- - - 表の顔は。

ボクは十一歳のときに、摸本宗家の摸本夢路に拾われ、養子となつた。

夢路には一人の息子と、その四人の孫に囲まれていたが、ボクはどうしてもなじめず。

そして夢路以外の家族はボクを容認せず - - - ボクは高校に入ると同時に家を出た。

高校に入つてからは、摸本宗家には極力、近づかなかつた。

それはやはり、ボクはその家でも異端者扱いだつたからだ。

現、摸本家当主である、摸本夢昭にも半ば勘当扱いも受けている。

それを突然呼び出すとは - - - 。

「やはり、遺産と跡目の話しかな」

近頃、夢路 - - - 爺さんの具合いが悪いことは知つてゐる

死ぬ前に、世襲を決めておきたいといつことだひつ。

郊外にある摸本家には電車を乗り継ぎ30分ほど。

空はとてもいい天氣だ。

- - - 雨が振り出しそうな氣配はない。

「そんなもんだよ、創崎」

つい、独り言を言つてしまつ。

摸本宗家にたどり着いた時、すでに何台かの車が停まっていた。どうやら分家の連中も来ているらしい。

無駄に広い門構え。純和風作りだ。

敷居を跨いで、屋敷に入る。

『貴方には、摸本家の敷居を跨いでほしくありません』

「……」

門を抜け、正門へと向かう。

途中、何人かとすれ違う。

挨拶をするヤツもいれば、あからさまに無視するヤツもいる。

前者は親戚筋の中でも遠縁で、後者が近しいものだろう。

正門には受付まであつたが運よく正門にいる立川さんにあえたのでそのまま声をかける。

「立川さん！」

「樹坊ちやま！」

いや、立川さん、今時坊ちやまつて……。

「まあまあいらっしゃくれたのなら、お迎えをよこしましたの」。

立川さんはこの家のホームヘルパーで、年は五十中頃女性だ。爺さん付きのヘルパーなので、摸本家に住んでいたころは、よくしてくれた。

「でも良かつた。来ていただけて。こられなれないと聞いたときはガッカリしたんですよ？」

「ボク、来れないことになつてたんですか？」

連絡自体、昨日の夜だったんですけど。

「旦那様が樹坊ちゃんは来られない」と…」

「……」

「やつぱり、そつか。

あの人達のやつぱりなことだ。

「まづはともあれ、親方様にお会いしてきました

立川さんはさうしてボクを中心促す。

「おー、お前何でそんなとひひでサボつてんだあ？」

後ろから、声がかかる。

振り返ると、そこには上等なスーツをだらしなく着こなした。一十歳そこそこの男が立っていた。

「高夢さん……」

立川さんが応える。

ああ、いたな、こんなヤツも。

ばくもとたかゆめ  
摸本高夢

現当主の弟、夢久の長男。…おやじくコイツも、跡田候補なんだろう。

「ああ？ 大事な仕事ほつぱりとして、何こんな浮浪児の相手なんかしてんだあ？」

…相変わらず、コイツのバカさ加減には頭に来る。

「いえ、樹坊ちやまは摸本家の」

「はあー？」の浮浪児が！？ バカ言つてんじゃねーよ……お前さあ、爺さん付きの女中だからって調子乗つてんじゃないのか？

「相変わらずですね、高夢さん」

立川さんを庇つべきではないのに、つこ口を出したしまつ。

ボクが立川さんを庇えば、コイツはさらに立川さんに酷く当たるだろつ。

「…そんなことには、できればなつてほしくないのに。」

「…なんか言つたか、ガキ？」

「…いつまでも子どものままですね、って言つたんですよ。高夢さん」

「こりでボクは挑発的な笑みを作る。

「…なんどこりで使用人に当たるなんて、どうせ親族会議から追い出されたんでしょう？いつまでもそんなんだから、夢霧さんに敵わないんですよ貴方は」

「てつテメえ…！」

「もう少し、キレイな言葉を使って下さいよ。人間の底が知れますよ？」

衝撃。

高夢の拳がボクの右頬を撃つたのだ。

衝撃で倒れる。

「樹坊ちやま！」

「構うんじゃねえ！…」

高夢の恫喝が辺りに響く。

「お前さあ、立場つてものがわかつてんのかよ？お前は摸本のおこぼれで生きてんだよ！？そういう恩義を忘れて摸本の直系であるオレにナメたこと言つてんじゃねーよー。」

高夢がボクを上から睨みつける。

睨みつけるとこ「」とは、必然的に - - - 。

「て、テメえ。何だその田はよー。」

- - - ボクと田が合つとこ「」とだ。

ボクは、高夢の田を睨みつける。

ボクの中の何かがゾワリと音をたてる。

何か、巨大な獣のようなイメージ。

その田で高夢を見つめる

- - - 嘰い殺してやるつか？

「な、なんだ！」

高夢はボクから後ずさぬ。

… やすがに摸本のはしぐれ、格の違いくらいわかるか。

「お前、オレにこんな田を向けて、じつなるかわかつてんだらうなあ……」

高夢が、虚勢のよくな洞窟をつく。

ボクは立ち上がる。

「じつなるっていつです、高夢さん？」

「お、お、お前……。」

「何の騒ぎですか？」

そこに、もう一人の摸本が現れた。

やはり高級そうな黒いワンピースを着て、後ろ髪を解き、氣だるそうな印付きで、摸本夢理は高夢とボクを見る。

「夢理か…。へへっ浮浪児が一匹迷い込んでたからさ、俺が優しく説教していたところや」

高夢はくつらつよつな笑みを浮かべる。

「そうでしたか…それはお疲れ様でしたね高夢さん」

「ああ、ちょっと待つてろよ。俺が今この浮浪児を追に出してやるからやー。」

「いいえ、席を外すのは貴方です、高夢さん」

夢理は - - - 半眼で高夢を見つめる。

「 - - - へ？」

「この人は、お爺様がお呼びだしてした人であり、一応、摸本の名を冠した人です - - - お爺様の対面上、ある程度の礼節は守っていただかないと」

「でもよお夢理、「イイツは...」

「何度も言わせないで下さい。この人はまだ、お爺様の庇護下にありますよ...。高夢さんは摸本を敵に廻すと...」

夢理の、齧しを含んだ言葉に、高夢は言葉を失くす。

「それに、私は、礼節のない人は嫌いです」

「.....」

チツと高夢は舌打ちする。

「いいか、ガキ。テメえがデカい顔してられるのも今のうちだ。ジジイが死んだら - - - ソッコーで摸本から追いで出してやるー。」

高夢はそつ吐き捨てる。

「行ひつけ、夢理ー。そんな奴と話してると品がないやー。」

「いえ、高夢さん、私はお爺様についていなければならぬので」

夢理は一矢「コトビ、ボクに向けるのとは違つ。自然な笑顔高夢に向ける。

「そつか、じやあまた後でな、夢理…ガキ一面倒起いすんじゃねえぞ」

そうじつて高夢は大股で出ていく。

その後ろ姿を見送つて、夢理はため息をつく。

「馬鹿の相手は疲れます。そつは思いませんかお兄様?」

夢理は一矢「コトビ、やはり邪悪そつな笑顔を向ける。

「まあ、何かしら波乱がおきると思つたけど、いきなりあんなヤツとHンカウンントするとはね…」

運が悪かつた。としかいいようがない。

「立川も」苦労でした。お兄様は私が」案内しますから、お仕事にお戻り下さ」

「す、すみませんお嬢様、樹坊ちやま。…見ていろ」としか出来なくて」

「いいんです、立川さん」

ボクは立川さんに頭を下げる。

「巻き込んですみませんでした」

「そんな樹坊ちやま……！」

「申し訳ありませんがお兄様、ここにいたらまた何かと厄介なことになりますので、移動してもよろしいでしょうか？」

「ああ、そうだな。 - - - それじゃ立川さん」

「はい、樹坊ちやまー！」

立川さんとの挨拶もそこそこに、ボケらは奥に入っていく。

爺さんの部屋の場所は知っていたが、ここは夢理に向いていく」と  
にする。

他の親戚筋には、極力あいたくなかったから。

-お兄様-

- なに? -

前を歩く夢理から声がかかる。

立川のいじめなら心配しないで下れ。彼女は  
私が護ります

そう、彼女は言った。

「…ありがとうございます」

「お兄様のためではござりませんわ。ただ単に私が……立川が好きなだけです」

その表情は、後ろに歩くボクには伺い知れない。

ただ、少し嬉しかった。

「そして、私が高夢さんを嫌いなだけですわ」

私怨かよー?'

「まったく。あの人を好きになれとは、お父様も夢久叔父様も無茶を言つてくれますわ」

そこまで嫌われているのか、高夢。

別に、同情しないけど。

「頭が悪いのは許せますが、馬鹿は許せないんですの」

そこまで言われるか、高夢。

別に、否定はしないけど。

「お兄様?」

「なに?」

「何できたんですか?」

「…………」

「……」は、お爺様以外の味方はいないと、はつきり申し上げたで  
わないですか？」

「まあ、ね」

「先ほどは立川が巻き込まれていたので、見るに見兼ねて助け船を  
出しましたが、本来なら、捨て置いてもよかつたのですよ」

「……やはり、アレはボクを助けるためではなかつたのか。

「一体、何が目的でここにきたのですか？」

彼女は、ここで足を止め、ボクに向きなれる。

「答えてください返答によつては、ここでお兄様にはお帰り願いま  
す」

彼女は、強固な口調でそつこつた。

……理由。

ボクがここにきた、理由。

そんなのは、考へるまでもない……。

「家族だからや」

「…………」

「爺さんはボクに」とつて家族だから。」

「会いたいってときには会いにこいべ。」

例え、地球の裏側にいたとしても。

例え、すぐ隣りにいたとしても。

「家族だつたら、会いに来るのは当たり前だろ?」

夢理は、少し、ボクの見たことなによつた、笑顔を見せた。

ほんの少しの失望が入り混じつた。笑顔。

「1点です」

「その理由では、1点しか差し上げられません」

「ねむやくねやハーデル高いんだな」

「ですが、0点ではないので、お爺様との面会を許可しましょう」

「ねむやくねやハーデル低いんだな」

「それでは、私はこれで」

そういうと、夢理は引き返す。「わー」

「あれ？お前は爺さん念佛していかないのか？」

「リリでお邪魔をする野暮でございません。それでは、私も用がありますので」

夢理は引寄せしていく。

その後ろ姿。

「なあ、せつめの。何で答えれば百点満点だったんだ？」

その問いに、夢理は振り向きもせず。

「そんなの、いえるわけないじゃないですか」

そのまま、見えなくなつた。

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

- - 摸本夢路。

摸本宗家もと並んで。

御年八十歳。

ひとりぼっちで迷っていたボクの引き取り手。

ひとりぼっちで迷っていたバクの引き取り手。

かつてはかなりの権力を奮っていたが、その晩年は - - -。

五十畳はある広い部屋。その中央に。

布団を敷き。

出会ったときより。一回りは小さくなつた。老人だった。

「久しぶりだな、樹」

その老人は、布団から上半身を起こし、確かな眼光で、ボクを射ぬくように見る。

「久しぶり。起きててもいいの? 具合い、悪いんだろ」

「あなどるな。例え明日果てる身でも、小僧に心配されるなど心外だ」

そうじって、ニヤリと笑う。

ボクも、同じように笑う。

少し、安心した。

だけど - - -。

老いた、獣の匂いがした。

「樹、学校の方はどうだ」

「うん。まあ、ぼちぼち。何とかやつてこるよ」

「そうか、俺の若いころは学ぶことも必死だった。その点、お前達は幸せ者だ」

「まあ、ね」

少しばかり、取り留めのない雑談が続く。

普通の家族がするような、当たり前の会話。

それは、とても - - -。

かけがえがない、ものだった。

老人は少し、息をつく。

「樹

「なに?」

「摸本の名を継ぐつもりはないか?」

「…………」

「摸本の名を継ぐ資格があるのは、お前と夢理くら二だ

「夢霧さんが - - - いるじゃないですか」

「あやつには、摸本の才覚は出なかつた。摸本の名を継げるのは、呪われた魂をもつものだけだ」

呪われた、魂。

呪われた家系。

呪家。

「だけど、ボクは - - - 摸本の出身じやない」

ひとりぼっちでさ迷つていた、獣なのだ。

何処にも、いたことがない。

何処にも、いる所がない。

「そう、その点が焦点だった。それでの愚息一人は反対してある。  
…自分のことは棚に上げてな」

「なら、む」

出自は変えられない。どんなにボクが望んでも。

「お前、夢理をめとるつもりはないのか？」

「お前、夢理をめとるつもりはないのか？」

「…………はあ？」

「何言い出したんだい」のジジイ？

「夢理には摸本の名を継ぐ資格がある。その夫ともなれば……十分、その当主たりえる」

いや、また。ジジイ。

「お前と夢理は来年には結婚出来る年となる。その時までに気持ちを固めておけ」

だから、待て、ボケジジイ。

「夢理は真理に似て料理もつまご。お前ひとつては渡りに舟ないい話してわないか？」

料理がつまご……？

舌までおかしくなったかこのジジイ？

ちなみに、真理といつのは夢理の母親だ。

「！」の間も、肉じゃがを届けてくれた

食ったのか！？アレを？今死にかけの老人が！？

「つまかった - - -」

しかもうまかったのかよ！？

「真理も料理が得意だった。よく『本当に、こんなものでよろしいですか？』と恐縮していたが、すべて絶品だった」

……真理さん。ボクがこの家にきたときは既に亡くなっていたが、是非とも、お会いしたかった。

「とにかく、夢理を嫁にめとってくれ。幸い、お前は夢理に気に入れられると」

「…ツツコミ!」多すぎて、今まで放置しておいたけど、最後の気に入れられてるってのは無理があるんじゃないかな？」

実際。彼女は家のため。好きなもののためにしか動かない。

「心配ない。あの娘はツンデレなのじゃ」

……そのボキャブラリーは、寝たきり老人がどうやって手に入れたらだろう。

……夢霧さん？

「まあもちろん当人同士の気持ちの問題じゃ。お前も年頃、いい人の一人や二人いるだろ？」

……。

「まあ、考えておけ。いつかは - - - お前もここの決断しなければならない」

- - - 決断。

何を捨て、何を得る。

ところどころ。

「出来れば - - - 俺の生きているうちに、嫁の顔を見せてほしいがな」

「……」

「樹、お前は、こんな家絶えてしまつた方がいい、と思つていいだわ」

話しが、飛んだ。

おやうく、ここの話しそが、この老人のしたかつた話しなのだらう。

「ここのよつな呪われた家系。お前は、そつぞつに絶えた方がいい。と思つておゐだらう」

思つてゐる。思つていねれ。

異端など - - - 孤独なだけだ。

「しかし - - 誰かが、持つていなければならぬのだ。この呪いは。きたるべき、災厄に備えて - - 共に滅びるために」

「……」

「人を呪わば六一一つ。並ば、もつ一つの六に対抗するためにも、この呪いは必要なのだ」

災厄に呪い。

「どこかで、そんな話しがあつたような - - 。

「だがな樹。呪いはあくまで呪い。決して - - この呪いで誰かを救おうなどと考えるではないぞ?」

「……」

やめろよ - - - 。

「呪いでは、人を救えない。人を呪わば六一一つ - - 自滅するだけだ」

「やめろよ

それじゃまるで - - - 。

「樹。お前は、類い稀なる呪いを持って生まれた。 - - それが何を意味するのか」

「それじゃまるで - - - 」

遺言みたいじゃないか。

「何か、巨大なものに対抗するためのものではないかと - - - 僕は思うのだ」

巨大なもの。未来。創崎誓衣。

「わかつたよ。爺さん。オレは - - - この呪いと向き合つて生きていくから」

そう応える。家族である老人に。

老人は少し笑い。それでも、真剣な目で。

「呪いでは、人を救えない。共に自滅するだけだ。 - - - それだけはユメユメ忘れるな」

時刻は正午過ぎ。天気は晴れ。

少年のボク。

老人の夢路。

家族。

貴方がいるから - - - ボクは孤独でなくなつた。

異端ではあつたけど。

孤独ではないと、錯覚できた。

一人ではないと、誤解できた。

摸本樹は、そのことに、本当に感謝してゐるんだから - - - 。

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

帰り道。

摸本家からは、特に揉め事もなく、無事出ることができた。

立川さんには挨拶をしておきたかったが、爺さんに言伝を残し、そのままきていた。

『呪いは呪いなんだよ。人に関わればその人を呪い何かをなそとすれば、呪いによつて憚れるんだ』

かつて、ボクにそういつた人がいた。

その人も結局、呪われた身で、誰も救えず、ボクも救えず、自分も救えなかつた。

一年ほど、一緒にいた人。

摸本夢路に引き取られる前の、ボクの保護者。

結局、あの人はボクの近くにいたから、あんなにも早く死んでしまつたのだろう。

夢路に会つまで、ボクは自分の呪いを制御することもできなかつた、未熟なボクのせいだ。

「ボクはいつたい、どれだけの人を不幸にすれば、死んでいいんですか？赤道さん……」

嘆いた言葉は、誰にも聞こえない。

誰にも届かない。

何にも届かない。

だけど……。

「アレは……」

電車の窓から、どこかで見た看板が見える。

アレは……。

「間もなく停車致します。お降りになるお客様は――」

電車のアナウンスが響く。

ボクは、何かに急かされるように、その降りたことのないよつな駅を降りる。

「そんなバカな…」

確か、あの時ボクは - - - 。

改札を抜ける。そこにはいつか見た風景。

昼下がり、平日だというのに、大勢の人がいる。

誰かの夢で見た風景。

夢でしかなかつたはずの光景。

「だけど、まだ」

足りない。

予知だといふなら、まだ、足りない。

雨が、降つていない。

- - - 何か、冷たいものが、頭に当たつた。

空を見上げる。

雲が、雨が、さつきまであんなに晴れていたのに - - - ?

ポツリポツリと降り出した雨は、次第に雨足を強めていく。

突然の雨に驚いた人達は屋根を求めてひた走る。

その最中、一人、雨の中、ビルの看板を眺めてボケつとしてる少年をいぶかしく思いながら。

ボクは待つ。心は呆れるほど平穏。

これで、それが起ころるなら、それは、かなりの決定打になる。

雨が降る。その程度のことならまだ偶然で片が付く。

だがしかし、これ以上の決定打を見せられたら - - - ?

一瞬の、稻光。

いつの間にかの雷雲が、ビルの看板を直撃した。

大気が震える。

ボクも震える。

もはや - - - 確定的。

いくらなんでも、ここまででの偶然は予測できない。

これは、未来なのか？

これが、運命なのか？

巨大なものが、ボクの前に現れていた。

件崎 - - -。

件崎の悲願。

未来を知ること。

人間を越えること。

それが、その片鱗が、ボクの前に。ボクの運命をおし流すほどいの存在が、ボクの前に。

あの夢の - - -。

あの夢の続きをは、どうだった？

確か、ボクは一人ボケつと空を見上げていたら、そこに傘を差されて - - -。

ボクの上に、傘が差される。

薄いピンク色をした。かわいらしい女ものの傘。

夢では、ここでボクが振り返り、そこで追い出された。

ボクは、あの時と同じように、振り返る。

「雨が降る、って書いてあつたでしょ?」

「創崎、誓衣 - - -」

今はもう、その名は戦慄を持つて呼ぶ。

「よくこの場所がわかつたわね。…まあ、今日の夢にこんな感じであなたにあつたような気もするし…貴方、また人の夢を盗み見たわね」

二の句が継げない。

「仮の顔も三度と言つから、今回までは許してあげるわ。でも、次に許可なく盗み見たら - - - 殺すわよ?」

「は、ははっ」

自然と笑いが込み上がる。

「?」

「あはははははー」

「どうしたのよ、突然?」

創崎が少し、焦つたように聞いてくる。構うものか。

ボクは今、嬉しくて嬉しくてたまらないのだ。

「あはははははー」

創崎誓衣。キミは最高だ。

キミはボクが出会い系いたくて出会い系いたくてたまらなかつた人だ。

運命を変え感じる。」そのまま愛の告白を変えしたいくらいに

ボクは雨の中、狂ったように笑い続ける。こんなに笑つたのは生まれて初めてだ。

「摸本……くん?」

彼女がボクの名を呼ぶ。

考えてみたら、これが初めてなのではないだろうか?

「ははは……いや、落ち着いた。もう大丈夫だ、創崎」

「……そう? 私には貴方のキャラが完全に崩壊したように思えたわ」

「ボクのキャラはこれから新しくなるんだ、気にしないでくれ」

自分でわかる。今、ボクは最高にハイになつていてる。

テンションがおかしい。今だかつてないモチベーションだ。

「そう。それならいいんだけど……」

創崎は今のボクのテンションに気圧されたのか、少し、引き気味だ。

「でも、これで私のことを理解してくれたでしょう?」

創崎は、確認するかのよつてつ。

「ああ、理解した。キミの能力は、『ラプラス』は確かに」

そして、ボクのやるべきことを - - - 。

「さて、立ち話もなんだ。早くこいつ。服も濡れちゃったし、急がないと - - - 」

「ちょ、ちょっと摸本くんどうに行くつていうのよ~。」

創崎は慌てたよつて。ボクに聞く。

ボクは、いつかの彼女のよつて、答える。

「ボクの家に決まつてているじゃ ないか」

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

摸本家。

その裏の顔は - - - 。

呪われた家系。

呪われた血族。

その呪いは、名前に冠した通り。

『**摸**』

やはり、コレもかなり有名な名前なのではないだろうか？

古来、大陸から渡ってきた。魔物。

その特性は - - - 。

夢喰い。

人の夢に入り込み、その夢を喰べる魔物 - - - 。

それが『バク』だ。

摸本家は、その呪いを受けた一族。

体の中にバクを宿し、誰かの夢の中に入り込み夢を喰らう。

貧食の魔物なのだ。

ボクは彼女に自分はバクなのだと名乗った。

自分を - - - 人外だと認めた。

自分を - - - 異端だと認めた。

自分を - - - 化け物だと告白したのだ。

ただし、摸本家については伏せておいた。

あくまで、「レは一個人の、ボクの能力だということにしておいた。

嘘をついたことは心苦しかったが、彼女には呪家に関わってほしくなかつたし、なにより - - - 宗家に何かしらの迷惑がかかるのは避けたかつた。

彼女はボクの話を、聞いているんだか聞いてないんだかだったが、それでもいい。

コレが、ボクが初めての自己紹介なんだから。

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

豪氣にもタクシーで家に帰り着いたときには、雨はもうやんでいた。

「以上が、ボクの話。証明は… 一度も体験したからもう十分だと

思つナニダ

「ええ、一度ものぞき見盗み見されれば十分よ」

「……」

少し、会話に刺がある。

「どうやら、ボクのハイテンションぶつに自分のペースを崩されたのを不満に思つたようだ。」

「どうしたの？覗き魔」

「……」「レとこつて弁解できる」とはない。

「どうか、やつき許してくれるとかなんとか言つてなかつたか？」

「えーと…創崎さん。お腹とか空いてないですか？」

食べ物で釣つてみる。

「やうね、お腹をとつてこないから、確かにお腹が空ってるわ」

「よし、それだつたら…」

「…ある食材。冷凍食品。乾燥パスタ。カツラーメン。

「…何か買つてきます」

さすがに道草は勧められない雰囲気。

「いいわ、『駆走になるんだから、私が作ってあげる』

そういうて創崎は台所に歩いていく。

「いや、今日は口クな食材がなくてさ」

創崎は失礼するわよ。と、冷蔵庫を開ける。

中には予想通り。多少の野菜と調味料が入っているだけで、ほとんど空っぽだ。

「ほらな、ちょっと買つてくるから待つていてくれよ」

「いえ・・・これだけあれば十分よ」

…マジですか？

「いや、いくらなんでも・・・」

「いいから少し待つてなさい。『駆走を作つてあげるわ』

・・・貴方は鉄人なんですか？

言われた通り、犬の如くしばし待つ。

思えば、この部屋に一日続けて人が来るなんて、稀有なことなのだ。

そして二人目は同級生の女のコ。しかもボクのために料理を作ってくれるという。

ボクは気付かぬうちに、かなりの偉業を成し遂げてしまつたのでは  
ないだろ？

「待たせたわね」

創崎から声がかかる。

「え？ もうできたの！？」

時間にして5分とたつていないうきッキンタイム。

なんだ貴様。天才なのか？

「ええ、運ぶからテーブルを片付けて」

「わかつた…」

ボクはいそとテーブルを片付ける。

うん。なんかドキドキしてきた。

彼女は料理をお盆に乗せ、運んできた。

テーブルにあります。

テーブルには、一個のカツラーメンが乗つかった。

カツラーメンである。

まいづかたなきカツラーメンである。

「創崎、これは？」

ボクはたまらず創崎に尋ねる。

「人類の産んだ究極の料理、カツラーメンよ」

カツラーメンは料理とは言わない。

「ふふつ。摸本くんはこれがただのカツラーメンだと思っているよつね。甘いわ。私がそんな芸のないことするはずないじゃない」

すると、「コレは何かのアイディア料理に変身するのだらつか？」

「やうそろ頃合よ蓋を開けてみなさいな」

言われた通り、蓋を開けてみる。

中には、これでもか、というくらいマヨネーズが入っていた。

一度、創崎を見る、そのあと、カツラーメン見て、ふたたび創崎を見る。

「お湯を注いだあとに、マヨネーズを入れて蓋をするのがミソなのよ」

聞いてねえよ。

「それでは、いただきます」

そういうつて創崎は自分の分のカツラーメンを一口にする。

「何て言つた、幸せそ�だ。」

「…………」

「まあ、幸せの形は人それぞれだから、いいか。」

そして、ボクも創崎特製カツラーメンをすすつた。

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

食事が終わり、「ゴミ」を捨てる。

創崎特製カツラーメンは、まあ好きな人は好きなんだろう。……

「ボクは普通が一番だ。」

「さて、そろそろ……本題に入りましょうか？」

本題。創崎の本題。

予知夢。

「聞くけど摸本くん。一番最初の夢を覚えてる?」

あの夢。一番最初の夢。あの地震。

「ああ、身を持つて覚えてるよ」

「やつ、助かるわ。私は、自分の見た夢を断片的にしか覚えてないのよ」

そう言つて、彼女は例の口記帳をとりだす。

『イメージはのんびりしてゐる。場所は学校の教室。時刻は昼間。授業中に地震が起ころ。かなり大きい。教室の床が抜ける。私は慌てて教壇のほうに行くが、中央から飛んできた男子生徒に突き飛ばされ、落ちてしまひ』

なんか、違つよつた気がする…。

「いきなり突き飛ばすなんて、何か私に恨みでもあったのかしら?」

「さあ…なんかの思い違いじゃないか?」

ジロリ、と創崎が睨む。

負けるな、誤解なんだ。

「まあ、それは不問にするとして、問題は田口ちよね

「田時は明日の正午、ちよっと前だ。それは、見た」

記憶している。黒板の日付、時計の針。

「明日つて……」

「そう、明日の正午。時間とこちゅや、一十四時間切つてるな」

創崎は、ただでさえ白い顔を蒼白にして……。

「大変じやない！ 急いで街の人達に伝えないと……。」  
彼女は慌てて立ち上がる。ボクはそれを制した。

「落ち着けよ。『明日地震が起きる夢を見たから避難してください』なんて誰が信じるんだよ」

そんなヤツは駅前에서도いけば大量にいる『時世だ。誰も、見向きもしない。』

「だからつて……」

「少なくとも、オレ達は助かる」

「…………」

「今すぐタクシーで飛ばして他県……いや、国外にでも出れば、地震からは逃れられる」

「…………」

「それに、キミの予知はかなりの確率だが……百パーセントってわけじゃないんだろ？ なら、他の人たちにはそれに賭けてもらいうじ

かない」

予知が - - - 外れることに。

「 - - - 貴方が、そんなことをいつとは思わなかつたわ…」

「 そりかい？」

彼女はボクに、どんな幻想を抱いていたといつのだろ？

ボクが、誰かを助けたり、救つたことがあるとでも思つていたのだろうか？

「 どうしようもないことなんだよ。地震なんて、どうやって防げつて言つんだ」

それが、現実。

現実は覆らない。

夢とは違つて。

「 そう、もういいわ。あなたには頼らない。私一人でなんとかするわ」

なんとか、できるわけがない。

でも - - - 。

「 それは、街の人たちを救つたために、自分が何とかする。という意

味か？創崎「

「？」

「誰かを救うために、自分を犠牲にするつもりがあるのか。と聞いているんだ」「

彼女は、特に考えるそぶりも見せずに。

「知つてしまつた以上、無視はできないわ」

そり、言った。

ボクには、できない」とを。

「やつら…なら、方法は一つだけある」

「あるの…？」

「ああ。キミはボクを自分の夢の記録係だとでも思つてたのかい？  
……くらんでも、大地震が来るといつのに、何の策もなしに、  
こう落ち着いてはいられないさ」

余裕たっぷりな雰囲気を出す。

実際余裕はそれほどないが……。創崎をリラックスさせるのが先  
決だ。

「じゃあ、やつきのは？」

「キリの覚悟を試させてもらつた。もし逃げ出す気があるとなつたら  
この策は不完全だからね」

「…………嘘つか」

「まあそれなりにはね」

創崎を見つめる。「いつからやれば、おちやらけはなしだ。時間もな  
い。

「創崎、予知を外すために……何でもできるか?」

「その覚悟は……あるわ」

創崎は力強く応える。

よし。

「創崎、ボクと一緒に寝よ!」

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

目覚めは爽快だった。

久しぶりに睡眠不足が解消された。

「久しぶりにまともな朝食でも作るかな

うちにある食材。冷凍食品。乾燥パスタ。

「道草を食べよ!...」

学校に行きがてらコンビニでもこぐとある。

学校はいつもおのづの平穏だった。

「おはよう、バツくん」

「ああ、おはよう。委員長」

「.....」

「どうした? 委員長」

「.....朝から爽やかなバツくん、かなり気持ち悪いな」

「.....」

やまつ、ちゅうと傷つべ。

「冗談だ。昨日は何故休んだのだ?」

昨日は金曜...いや、木曜か。

摸本宗家親族会議。

「いや、ただの風邪だ」

「そうか、それは災難だったな。もつ平氣なのか」

「ああ、もつ災厄はこないよ」

そつこつてボクは席を着く。

創崎がくるのは一時間目からだったか。

今日はいい天氣だ。

「チカツチは今日は欠席か。昨日は早退したし、出席率は大丈夫なのだろうか?」

「お前、本氣でそのネーミングを定着させる気なんだな」

授業をつける。

一時間目の途中。創崎が登校してきた。

休み時間、委員長と一方的なやり取り。

委員長の撃沈。これも予定調和。二時間目の休み時間。動くなら今だろつ。

「委員長」

「なんだ？」

「風邪が振り返した。早退する」

「とてもや」まで大事には見えんが…」

「オレは強がりだからな、そつ見えるんだ。実際は - - - 今にも倒れそうなくらいふらふらだ」

「… やうか。息災でな」

「ああそれじゃ、委員長」

その後ろから。

「紫藤くん、私も早退します」

「ん？ ああーー？」

「とひもやうは見えないでしょ、ひたど。 - - - 今にも倒れそうなくらい、ふらふらなんです」

「俺にはその通りにしか見えんが…」

そういうて劍崎は出てこへ。

「やうひ」とだか。やうへんな委員長…。」

そして、ボクもそれに続く。

あとには、何がなんだかわかつていらない委員長が残された。

+ - - + - - + - - + - - + - - +

「ここは、山の上。コンクリートで補強された強固な展望台。

この揺らぎ地震は直下型地震だったらしいへ、この展望台は無事だった。

「どこまで行くのよ？」

創崎はこきなり展望台まで来させられて、かなり不機嫌だ。といふ  
かいつにもまして顔色が悪い。

「展望台。それより創崎、大丈夫なのか？顔色がゾンビみたいだぞ  
？」

仮借のない意見を言つてみる。

「…薬の副作用よ。はつせりつて急くて仕方ないわ」

彼女は、柳の木のような印象だが、今はいつにもまして弱々しい。

まるで、枯れ木のようだ。

「それで首尾は - - - うまくいったの?」

「キミが覚えていないこと、それがうまくいった証拠だ」

ボクは自信満々に応える。

展望台は平日の昼間。利用者は殆どいない。

その時まで、時間にして数分。

街を見下ろす。

平穏そのもの。何一つ変わらず、人々はいつもの毎日を送っている。

「...」んな風に、街の時間は流れているのね - - - 知らなかつたわ

彼女はベンチに座り、遠く広がる街を眺めている。

ランチタイムなのだけれど。多くの人が商店街にあふれていて、みんな  
楽しそうに歩いている。

公園が見える。小さな子ども達が駆け回り、声を出して遊んでいる。

学校が見える。眠そうに授業を受けてたり、校庭で体育をしていた  
り、屋上でサボってるカップルもいる。

それは、幸せな光景だった。

ビートにも不幸なんてなくて、ビートにも悲しいことが見えない。

誰もが埋没する、幸せな日常だった。

それをボクは、遠い場所を見るように眺めている。

それを創崎は、遠い場所を見るように眺めている。

「… キミは同じ予知を何度も見るみたいだね。例えば昨日の雨の夢」

創崎は、気だるそうな瞳で、街を眺めている。

「アレを見るのは一度田何だろ?なぜ、同じ夢を一度見るのか?  
答は簡単 - - 変更があったからだ」

創崎は、気だるそうな瞳で、街を眺めている。

「予知は完璧だった。だけど未来は可変。今まで未だ未を創崎は『  
なんとなく』でしか見ていなかった。だから、未来は大幅な変更も  
なく、单一な夢しか見れなかつた」

創崎は、気だるそうな瞳で街を眺めている。

「だけど - - 今回は違つ。ボクといつ第三者。未来を正確に記録  
するものが現れた」

創崎は、ここで、視線を空に移す。

「ボクが予定調和を崩すたびに、キミの見る夢は変更されていった。今と異なった未来は多種多様とあつただろう。 - - -しかし、それはあくまでも一個人としての変更でしかない」

「空が綺麗ね」

「ああ。 - - -つまり、もつと曰大な。例えば自然現象のようなものは、一個人の変更では、とても改ざんすることはできない」

「私達の住んでいる街は、こんな顔をしているのね」

「中々気付かなかつたな。 - - -だから、今回は裏技を使わせてもらつた。いや、そんなものに対抗するなり、反則くらいつかないと、とても足りない」

ボクは腕時計を確認する。あと少し。

「それは、始めから『無かつたこと』にするしか方法がない。そんな夢は見なかつた。そんな未来は有り得なかつた、ということにね」

彼女は瞳を閉じる。どうやら意識を保つていられるのも限界みたいだ。

構わず続ける。

「キミの夢を消させてもらつた。正確には喰らわせてもらつた。 - - ボクはバクだからね、悪夢を喰うのは専売特許さ」

少し、自嘲氣味に笑う。

そう、始めて、意味をもてた。夢喰い。

未来は変わる。ボクは変わる。もう、何もなしえない、人を呪うだけの存在じゃない。

呪いでは、人は救えない - - - 。

そんなことは、ない。

ボクだって、何かを救えるときが、誰かを助けることが、できる。

誰かに、必要とされることが、できる。

此処に、居てもいいと、思うことが、できる。

もう、ひとりぼっちで迷っていたりなんかしない。

「もうすぐ時間だ。起きろ、創崎。喰われたいか?」

創崎に呼びかける、返事は、ない。

だけど、その瞳だけは、薄く開いた。

「カウントダウン。9、8、7、6、5、4

…正直、不安が、ないわけでも、ない。

ただ、ボクに出来ることはコレだけだったし。創崎には悪いが、ここで死んでもよかつた。

やれるだけやつて死ぬなら、きっと許してくれるだろ？。

街を眺める。いつもと変わらない平穏。

- - -。

「3、2、1、ゼロだ」

「……」

何も、起きなかつた。

何も、起きなかつた。

何も、起きないこと。

それが、ボク達の望んだ結末。

望んだ結末が、この通り。叶つた。

予知は - - - 外れた。

願いは - - - 叶つた。

想いは - - - 届いた。

なら、今は、それで十分じゃないか？

街は、平穏そのもの。誰しもが、一歩違う未来なら - - -。

今は、この街がたまらなく愛しい。

ボクが、救つた街だ。

ボクが、助けた人々だ。

「気分はどうだ？ 創崎」

「…悪くないわ」

創崎は、一度、街を眺めて、ふたたび、瞳を閉じた。

「お休み、創崎」

ボクは創崎の横に座り、彼女と同じ目線で街を眺める。

キミが、ボクをここに連れてきてくれた。

キミが、ボクをこんな気分にしてくれた。

幸せになれそうな気がした。創崎と二人なら。

創崎の頭がボクの肩にもたれかかる。ボクは微動だにせず。それを受け止める。

空は高い。暖かな春の陽射しの中、一人で眠るのも、決して悪くはない。

二人なら。

ひとりぼっちと言えない。

「それじゃあ創崎。今度はいい夢をね

それでは、夢で、会いましょう。

そんな恥ずかしいフレーズも、今なら口に出せそうな気がする。

街は平穏そのもの。ボクはその光景を、創崎を隣に飽きることなく眺め続けた。

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

「貴方の講釈が随分長いから、うつかり眠ってしまったわ」

夕刻の帰り道。

彼女はずっと言い訳ばかりしている。

その後、創崎は夕方まで結局起きなくて、ボクは何時間も動いては行けないという責め苦を受けることとなつた。

なぜか、少しでも動いたら、とんでもないことになるような気がし

て、トイレにもいけなかつた。

そして、夕方、ようやく創崎は田を覚ました。

おはよつ。ヒ挨拶をすると、肩に頭をおいた創崎と田が合ひ。

そのまま、数秒。

創崎は物凄いスピードで立ち上がると、これまた華麗なるバックステップで距離を取ると、拳を固め、脇を締め、拳を正眼に構え、腰を落とし、見事なファイティングポーズを決めた。

そうだ、彼女はボクサーだつたのだ…。

闘志剥きだしの彼女を何とかなだめて、帰る途中。その間も『女の口の寝顔を眺めているなんて最低』とか『変態』とか『痴漢』とか『暴行魔』等と（最後のは冤罪だと思つが）できれば、欲しくない称号をいくつも手に入れた。

まあ、反論はしないけどね。

「もう、気分は大丈夫なのか？…睡眠薬つてのは、ずいぶんと後に残るものなんだな」

「正確には導眠剤よ。…処方されて使わなかつたのを捨てないでとつといよかつたわ」

「備えあれば憂いなし、だ」

彼女が、もう一度、あの夢を見る可能性は高かつた。

だけど、夢を見るタメには、とにかくにも、眠つてもらわなくてはならないのだ。

ボクは慢性的な睡眠不足なので、何時でも何処でも眠れるが、彼女の場合そつはいかない。

『緊張して眠れない』だの『眠るところを見るな』等といろいろ面倒があつたが、彼女の家に移動し、彼女が持つていた導眠剤やらなんやらを使い眠つてもらつて、ボクは部屋の外で待機。といふことになつた。

その結果が、コレだ。

彼女は朝から導眠剤の副作用でだるそつだし、ボクはめでたく変態の称号を手に入れた。

：一方的にボクの被害が甚大な気がしないでもない。

彼女の言い訳が終わり、少し、間があく。

：ボクは、沈黙には慣れている。特に気にしない。

しばらくの間。二人とも無言。

「ねえ……」

- - 不意に、創崎が口を開いた。

「何だよ

ボクは、また悪口雑言かと思い、身構える。

「何で - - - 貴方は逃げなかつたの?」

出てきた言葉は - - - ボクが答えるのを意図的に避けていたことだつた。

「私が - - - 逃げてはいけない理由はわかるわ。私は、同じ夢を見なくてはいけない。だから、此処で起きることを予知するために、ここに残る。だけど - - - 貴方は、此処に残らなければならぬ理由は、ない」

理由は、ない。

確かに、その通りだ。

ボクには、街を救う理由もなかつたし。

街も、ボクに救われる理由はなかつた。

だけど - - - 。

『これは、呪いなんだよ、誰も助けられない。誰も助けられない、呪いなんだよ、樹』

それを、信じたくなかった。

疎まれさげずまれ厄介者扱いされ - - - 化け物と呼ばれる。

なにが悪い？

誰かと寄り添つて生きたいと願つてなにが悪い？

どこが悪い？居場所が欲しいと願つてどこが悪い？

幸せになりたいと - - - 願つて、どうしていけないんだ？

『集団は、集団に迷惑かけるものを決して許さない。なんで殺人者は罰せられるのか？答は簡単。集団で決めたことを守らなかつたから』

いつも、ビクビクしていた。

世界は、いつだってボクに優しくなかつた。

運命は、どんな時もボクに微笑まなかつた。

いつも、ボクは許して欲しかつた。

だから - - - 世界を救え。

誰かの助けになると証明できれば。

ボクにも、世界は優しくしてくれるかもしれない。

そう考えた。

そう考えた。

「そり、浅はかにも考えたから。

だから……。

「別に。オレには成功する自信があったし、予知の段階で、自分だけは生き残る算段があつたからさ」

「そり……」

「それに」

「それに？」

一度、言つてみたかつたセリフ。

他人には関わらず、独りで死ぬことを目標として生きてきたボクの、憧れの、永遠に使うべきことはないと……思つていたセリフ。

「だつてさ、知つてしまつた以上、見て見ぬふりはできないだろ？  
？」

「……そこで、創崎誓衣は初めて、

普通の女の「らしい、笑顔見せた。

その顔は、とてもかわいらしく。ともすれば、ホしてしまいそうな、笑みだった。

「摸本くんも……そんな顔で笑う時もあるのね」

顔に手をあてる。

笑っている - - - ? このボクが?

「夢は - - - 」

創崎は、独り言の用に呴ぐ。

「夢は、覚めてしまえば、何も残らないところにその価値がある。  
現実に続く夢なんて、醜惡以外、何物でもないわ」

どこか、自分に言い聞かせるような響きだった。

ボクは、その言葉の意味に気付くことはできず、そのまま一人、黙つて帰路についた。

別れの挨拶は、しなかった。

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - +

蛇足 - - - といつより、後日談。

いろいろあって、授業をサボり過ぎたボクに、一応の進学校であるこの高校は居残り補習を命じられた。

憂鬱な気分で指定された教室にいくと、そこには見知った女生徒が、教室に独り残されていた。

「…………」

ボクは黙つて、女生徒から離れた席に座る。

「…………」

ボクはもうつた課題を黙々とこなす、

その女生徒は、もう終わっているのか。はなからやる気がないのか、窓の外を見て微動だにしない。

「…………」

ボクは課題に取り組む。

不意に。

「昨日は、夢を見たわ――」

女生徒が話し掛けてきた。

「どんな?」

ボクは手を止める。

- - - いじつしてボク達は時たま話しあつ仲になつた。

- - - いじつしてボク達は、友達になつた。

今まで、何も持つていなかつたボクが、初めて手に入れた、友達だつた。

だから、まあ、幸せといえば幸せなのだ。

b a k u m o t o   i t h u k i   T O   B E   N E X T  
. .

もしかしたら、有り得たかも知れない現実。

そこは、廃墟だつた。

大勢の人が死んだ。

多くの物が壊れた。

沢山の事を失つた。

その廃墟の中。

一つの人影が揺らめいている。

それは、ひどく、  
陰鬱な歎きだつた。

「足りない足りない足りない足りない足りない足りない足  
りない足りない足りない足りない足りない足りない足  
りない足りない足りない足りない足りない足りない - - - こんな  
じや、足りない」

ゆらゆらと人影が廃墟の街を歩く。

「もつと多くの不幸を。もつと巨大な災厄を。 - - - ありつたけの

絶望を、夢に見ろ」

それはさながら、ひとりぼっちで迷っている化け物ようだつた。

「だから、今回は見逃してやる」

その廃墟の世界は、暗幕が覆いかぶさるよつこ、崩壊していく。

消えていく。

喰われていく

復讐してゐる

その人影も、暗幕に捕われる前に、消えていく。

やがて世界は暗闇に消えていく

後に残つたのは、誰かの不気味な歎き。

だが、いつしかそれも聞こえなくなる。

あたりまえといえまあたりまえ。

これは、有り得なかつた現実。

これは、有り得たはずの現実。

だけど、これはもはや摸に喰われた夢の後先。

そこには、もうなにも残つていない。

- - - だから、夢の続きは現実で行われるのだ。

(後書き)

これは『バクの見る夢』の本編にあたる話です。よつやく、ヒロインがでてきたのですが、なんだか影が薄い気もします…。あと、ご意見ご感想待っています。それでは読んでいただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5277a/>

---

バクの見る夢『起』

2010年10月12日02時56分発行